

古今東西 くんぐん 行きます!

郡市長がさまざまな現場を訪れ、市民の皆さまの活動の様子などをお伝えします



▲スチューデントシティの市長(左)と並んで



▲コンビニ、新聞社、銀行などの店舗を模したブースが並びます

「仙台子ども体験プラザ—Elem」を訪れ、活動を支援する市民ボランティアの方々に話を伺いました。

仕事や社会の仕組みを学ぶ

アエル8階に、小さな「街」を再現した仙台子ども体験プラザがあります。震災復興プロジェクト「カータルフレンド基金」の支援を受けて、平成26年に開館。小学5・6年生が、ブースに再現された市役所や店舗で街の一員として働く「スチューデントシティ」と、中学生が、家族や収入など与えられた条件の下で生活設計を考える「ファイナンスパーク」の二つのプログラムが

行われています。実際に企業で働く社員の方々と市民・保護者ボランティアの皆さんのサポートを受け、体験を通して社会の仕組みを学びます。

訪れた日は、福室小学校の6年生がスチューデントシティに参加し、市役所と9企業のブースで、仕事をする時間と、働いて得たお金で買い物をする時間を交代で体験していました。お客さんを大きな声で呼び込み、しっかりと商品の説明もする姿は大人顔負けです。「朝はみんな緊張しているのですが、できることが増えて周りに認められることで自信を付け、どんどん積極的になります」と、ボランティアの遠藤美穂さん。同じ課題に向かってチーム全体で力を合わせ乗り越えていく様子に、子どもたちの成長を実感するそうです。

支えられて成長する

「息子の施設利用をきっかけにボランティア登録し、5年になります。子どもたちと接するとエネルギーをもらえますし、楽しみながら続けています」と、原田真夫さん。脇坂裕美さんは、「売れ残りそうな時は値下げを考慮するのですが、逆にサービスを追加して値上げすることでお客を集めた子がいて、その柔軟な発想に驚きました」と話されます。子どもたちの成長を感じるだけでなく、教わることも多いそうです。また、各ブースで仕事の進め方を教えてください。各ブースで仕事の方々の支援は、この

プログラムに無くてはならないものです。「企業の皆さんは、子どもたちにも大人と同じように接し、自分で考えて行動できるよう基礎から指導してください」と、三浦忍さん。ボランティアや企業の皆さまの温かいサポートと、社会全体で子どもたちを育もうという思いに支えられ、この活動が成り立っていると改めて感じます。

社会を生き抜く力を

一日の締めくくりに、市長役を務めた高橋拓也さんは、「みんなの協力があって街は成り立ちます。体験を通して、周囲の人への感謝と責任を持ち仕事をする大切さを学びました」と話してくれました。この学びを、今後の生活や将来に生かしてほしいですね。このような施設は、全国でも4カ所のみ。本市のスチューデントシティの利用児童数は、4万人を超えました。仕事について学ぶことは、自分の将来を主体的に描き、社会を生き抜くことにつながります。子どもたちの貴重な学びの場を、皆さまとの連携の下、これからも大切にしていきたいと思えます。

仙台子ども体験プラザ市民ボランティアの皆さん



三浦忍さん



原田真夫さん



遠藤美穂さん



脇坂裕美さん

